

特集『法華経』とシルクロード

論文

ノルウェーのスコイエン・コレクションと

梵文法華経断簡の発見

松田和信

一 はじめに

今世紀初頭、英国のスタイン (M. A. Stein 1862-1943)、『フランスのペリオ (P. Pelliot 1878-1945)』ドイツのグリウンヴェーデル (A. Grünwedel 1856-1938)、『我が国の大谷探検隊を始めとする各国の探検隊は競って中央アジアへ足を踏み入れ、シルクロードに点在する遺跡を発掘し、様々な言語で書かれた膨大な量の出土文献を持ち帰

った。またこれらの探検隊とは別に、英国のパウアー大尉 (H. Bower 1858-1940)、『英国のインド学者ヘルンレ (A. F. R. Hoernle 1841-1918)』ロシアのカシユガル駐在総領事ペトロフスキー (N. F. Petrovskij 1837-1908) といった人々も、インドあるいは中央アジア赴任中に土地の人たちが持ち込んだ出土文献を買い集めた。そしてこれらの出土文献は、その後の仏教研究に大きな影響を与えることになった。発見された資料のほとんどは断簡であつ

たが、既に失われたと思われていた数々の重要文献の原典が、その姿を現したからである。

ところで、このような中央アジアにおける発見が現在に至るまで続いていたわけではない。一九三一年に現在のインド・パキスタン間の国境紛争地帯に位置するギルギットの仏塔跡から発掘された約三千葉の樺皮写本（二部の紙写本を含む）いわゆる「ギルギット写本」の発見を最後に、探検ブームが去り、あるいは戦争がもたらした世界情勢の変化等により、その後例外的に少数の写本発見の報告はあったが、大規模な写本発見は今後もは有望むべくもないものと思われていた。

しかし、この数年の間に状況は劇的に変化した。旧ソビエトのアフガニスタン介入と、それに続いて現在にまで至る不幸なアフガン内戦は、現地の荒廃と引き換えに、世界の古写本マーケットに膨大なアフガニスタン出土文献の流入という皮肉な結果をもたらしたのである。マーケットに現れた写本類の大部分は最終的にヨーロッパの研究機関あるいはコレクターに引き取られて行った（あるいは行きつつある）。その中で、すでに我が国でも、

百点に上るバクトリア語写本がロンドン大学のシムズ・ウィリアムズ教授によって報告されているが、筆者のような仏教研究に携わる者にとつて注目すべきは、最近話題を呼んでいる大英図書館 (British Library) の入手したカローシュティー樺皮巻物、さらに筆者も調査研究に参加しているノルウェーのスコイエン・コレクションに含まれる仏教写本類である。

二 大英図書館のカローシュティー樺皮巻物

一九九六年の六月、ロンドンの大英図書館は記者発表を行い、同館が匿名のスポンサーの資金援助で入手した、アフガニスタンのハッダ遺跡から出たという素焼きの壺五個と、その中のひとつに入っていた写本を公表した。⁽²⁾ 写本は白樺の樹皮（樺皮）で作られた巻物で、カローシュティー文字によってガンダーラ語の仏典が書写され、全体で十三巻よりなる。驚くべきことに、これら巻物の書写年代は一世紀に遡り、知られている中では、死海文書にも比すべき世界最古の仏教写本だという。記者発表の時点で、これらの巻物はすでに同館の保存部

いたのとはほぼ同じ頃、ロンドンの古書籍商サム・フォックのアジア関係の写本を網羅したカタログ第十七号『ヒマラヤとインド亜大陸の写本』が届けられる。その中には一〇八葉よりなる仏教写本の断簡が掲載されていた。⁽⁶⁾それらはインド系グプタ文字およびギルギット・バーミヤン文字で書かれた仏教写本の断簡で、すべてアフガニスタンから出土したものであった。スコイエン氏はこれを購入し（価格は当時のレートで約一、二〇〇万円であった）、その後ヨーロッパの古書マーケットに現れたほぼすべての写本を買い集める。

一九九七年の一月、スコイエン氏の写本蒐集のニュースを知った筆者は、オスロ大学のイエンス・プロールヴィック (Jens Bratvig) 教授、同じオスロ大学のフィン・ジムソン (Georg von Simson) 教授、ベルリン・フンボルト大学のイエンス・ウヴェ・ハルトマン (Jens-Uwe Hartmann) 教授（今年の秋学期よりミュンヘン大学に転出予定）、ベルリン・インド博物館学芸員のローレ・ザンダー (Lore Sander) 博士（現在は博物館を定年退職）の五人でグループを組み、プロールヴィック教授を代表者と

してスコイエン氏と交渉した結果、幸いにもすべての写本の研究と出版の許可をスコイエン氏より獲得し、五人のそれぞれがスコイエン氏と文書により取り決めを交わした。

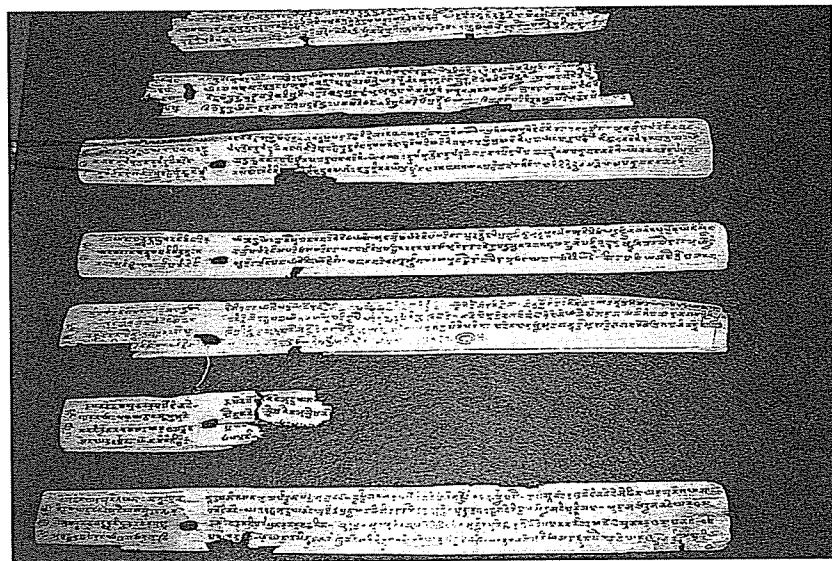
許可を受けた我々のグループは、さつそく一九九七年十一月、および一九九八年の十一月の二度スピッケスタッド郊外のスコイエン氏の山荘を訪れ、現地調査を行った。そこで目にした仏教写本は、紀元一世紀に遡るかもしれないカロシユティー文字写本断簡から、七、八世紀のギルギット・バーミヤン書体の写本に至るまで、まるで数世紀に亙るインド文字資料のすべてがそこにあるといっても過言ではなかった。我々が最初に訪ねた一九九七年十一月の時点で総数は約六千断簡、一年後の昨年十一月の時点で一万断簡に膨らみ、恐らく本稿を書いている現時点でも膨張を続けているはずである。ただし、この数はあくまでスコイエン氏の言う総数であり、我々が実際に数えたわけではない。注意しておきたいのは、全体の約四分の三ほどは数センチメートル四角の小さな断簡である。しかも一万点という数は、文字が一字し

か回収できないような微少破片を多く含んでの数である。大雑把なことしか言えないが、それらの全文字量から推定すれば、ベルリンにあるドイツ探検隊蒐集集のトルファン写本コレクションには遠く及ばないであろうが、筆者もその全体を閲覧した経験をもつ大英図書館のスタイン・ヘルンレ・コレクションより多いのではないかとの印象を持った。⁽⁷⁾

一九九七年十一月の調査は一週間にわたって行われたが、その間、我々はオスロよりスコイエン氏の山荘に通い、すべての写本断簡をメンバーの一人であるインド古文書学の専門家ザンダー博士が構築した書体の編年に従って分類し、ファイリングする作業を行った。その大枠の書体別分類は、カロシユティー文字、クシャーナ文字、北東型グプタ文字、北西型グプタ文字、ギルギット・バーミヤン第一型文字、同第二型文字（我が国に伝えられた悉曇文字に同じ）の六種である。写本の材質は貝葉（タラ椰子の葉）、樺皮（白樺の樹皮）、動物の皮の三種で、紙写本は一葉もない。動物の皮に書かれた仏教写本というのは極めて珍しい。筆者が実見したのもこれが

最初であった。

複数のディーラーが等しく伝えるところによると、これらの写本の大部分はアフガニスタンのバーミヤン渓谷のとある洞窟からもたらされたものらしい。ただし正確な場所は不明。それは自然の洞窟で、入り口はひとつ、内部は三本の洞窟に別れ、その中のひとつの奥まった所に仏像が安置され、その仏像の周辺に大量の写本が散乱していたという。そして土地の人から複数の業者の手を経てヨーロッパ市場に流れ込んで来たという。ただしこれはあくまでスコイエン氏購入写本の相当部分の由来であって、我々の見るところ、特にさしたる根拠があるわけではないが、アフガニスタンの他の地域、あるいはギルギット等のパキスタン域で発見された写本も含まれているように思われる。出土地がはっきりしないのは残念なことではあるが、今とはかくこのような膨大な古写本が戦乱のアフガニスタンから回収されたことだけでも幸いとせねばならないのかもしれない。特に、今まで知られている世界各地の中央アジア写本コレクションに比べて、スコイエン氏のコレクションの持つ重要性は、こ



整理中の勝鬘經、阿闍世王經、諸法無行經の貝葉写本（1997年11月）

れが直接的なインド文化圏（ガンダーラ）より現れた、初めての大規模な仏教写本コレクションだという点である。無論、同じようなものにギルギット写本があるが、こちらにはそれよりはるかに古い時代の写本が数多く含まれている。驚くべきことにカローシユティー貝葉断簡も二百近く見出されている。これまで知られているカローシユティー資料は樺皮か木簡であって、貝葉写本の発見は世界初である。

最初の調査の後、スコイエン氏自身の手で、すべての写本の複写がオスロとベルリンおよび筆者用に三セット作成されることになった。そして筆者分は約束通り昨年四月以降ブールヴィック教授を経由して届きつつあったが、修復に出されているものを除いて、昨年十一月の二度目の調査の際に、残りを受け取った。これらはすべてスコイエン氏の山荘にあるキャノンのデジタル・カラー複写機で直接撮られたものである。将来の色褪せがいささか心配ではあるが、美しい原寸大コピーで作業しやすい。

四 発見された文獻

二度の現地調査、および受け取った写本のカラー複写を通して、我々は現在徐々にスコイエン・コレクションの解読と文獻の同定を進めつつある。現時点で判明している文獻を古い順に記せば、まずカローシユティー貝葉写本中に見出されたガンダーラ語の小乗『大般涅槃經 (Mahāvastu)』の断簡数葉がある。これはカローシユティー写本の解読と出版を担当して我々に助力していただけになったサロモン教授による比定である。サロモン教授が我々に示されたローマ字転写テキストから判断すれば、その中には同經に組み込まれた『大善見王經 (Mahāsattvaśāstra)』の末尾に相当する断簡が含まれるが、現存する『大般涅槃經』のパーリ語、梵文、漢訳バージョンとは一致しない。最も近いのは、法蔵部所屬とされる漢訳『長阿含』に含まれる『遊行經』のその部分であるが、それでも一致するのは半分程度か。恐らく別な教団の伝える別バージョンなのである。サロモン教授に直接伺ったところでは、ここに現

れるガンダーラ語は純粹なものではなく、その語形に梵語の影響を強く残している。恐らく年代的には大英図書館の巻物より新しいものであろうとのことである。

次に、ガンダーラ博士とブールヴィック教授がクシヤーナ文字貝葉写本の中に『八千頌般若經 (小品般若)』の断簡約四十葉を見出した。ガンダーラ博士の編年では、二世紀前半に遡る写本である。言語は仏教梵語の一種であるが、その中でも『大事 (Mahāvastu)』に用いられたような俗語で書かれている。例えば *evam vutte* が *evam vutte* などと表されている。二世紀前半といえは『般若經』の成立とそう離れていないであろう。これは当時の『般若經』が最初から完全な梵語で成立したのではなく、それに先だって相当崩れた俗語の『般若經』がインドに存在していた直接の証拠が現れたのである。少なくとも、これは現存最古の大乗經典の写本であり、何とそれが完璧なクシヤーナ文字で書かれているのである。

次に、筆者は『勝鬘經 (Svīradattasīhanadānīyaśāstra)』の完全な貝葉写本三葉を含む数葉を、ハルトマ

ン教授はこれと同じ写本セットに含まれる『阿闍世王經 (Ajaśatrukaukṛtyavinodanastv)』の断簡二十葉以上を見出し出した。またこの写本セットには『諸法無行經 (Saddharmapṛaṇīti)』の断簡も多く含まれることが確認されている。いずれもこれまでは他文献における引用を除いて原典の知られていなかった重要文献である。北西型グプタ文字で書かれ、四世紀前半の写本であるという。事実とすると、こちらも驚くべき年代の写本である。いずれも基本的には梵語で書かれているが、動詞の崩れ方はひどい。アオリストと現在形が混合したような語形が多く見られる。

コレクションに含まれる最も新しい年代の写本は、ギルギット・バーミヤン第一、第二型書体で書写された写本であるが、第一型書体で書かれた樺皮写本の中に、因縁物語付きの『法句經』の断簡数点を見出した。漢訳と比べてみたが『法句譬喻經』等とは一致しない。どうやら新たなヴァージョンの因縁物語付『法句經』のようである。etasmīn vastusmin などという独特の表現が見られることからすると、大衆部 (Mahāsaṅghika) の『法句

經』の可能性が考えられるかもしれない。

なお、コレクションには二点だけバクトリア語の皮革写本断簡が含まれている。その解説はシムズ・ウィリアムズ教授に依頼しているが、教授の暫定的解説テキストを見た限りでは、これは間違いない仏教文献、しかも大乘文献である。興味深いことに、そこには種々のブツダの名称が列挙されているが、それらの名称は『無量壽經』あるいは『法華經』に現れる種々のブツダ名と共通しているのである。

さらに確認された文献の名前だけ掲げておくと、『月上女經』『宝星陀羅尼經』『摩訶僧祇律』『四百讃』『ジャータカ・マラー』『アショカ・アヴァダーナ』『チャングー經 (Cāṅgū)』、その他梵文阿含・律断簡などがあり、そして勿論『法華經』の断簡もある。なおアビダルマ関係の断簡が数多く見出されているが、現時点では一葉も同定されていない。『チャングー經』とは、パリー中部經典の第九十五經 (Cakkavāla, MN 95) に対応するものであるが、漢訳阿含には見出されない經典である。あまり類例のない北東型グプタ文字で貝葉に書写

され、ほぼ完全な数葉を含む複数の断簡が回収されている。この經典は、*dharmadīpāṇīyakaṇṭhi* という、唯識文献を読む者にはよく知られた重要用語の現れる經典であるが、この語は断簡中にも数度確認できる。我々のグループの中では現在この『チャングー經』の断簡が、大衆部の長阿含もしくは中阿含の一部ではないかとの議論が続いている。

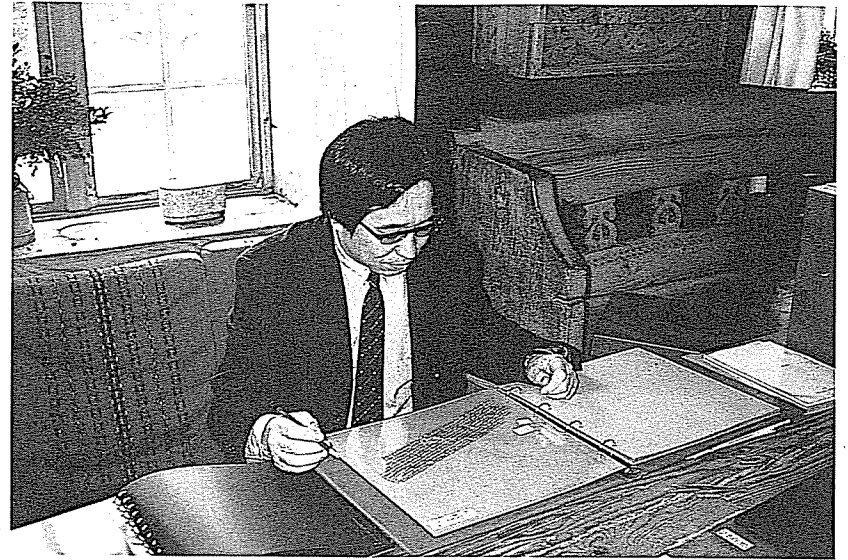
以上、ここで言及した写本断簡は、スコイエン・コレクション全体から見れば、ほんの数パーセントにすぎない。大英図書館の巻物同様、こちらの解説研究も今始まったばかりなのである。

五 法華經断簡の発見

スコイエン・コレクションに『法華經 (Saddharma-piṇḍarīkaśāstra)』の断簡が含まれていることが判明したのは、ほんの数カ月前のことである。それは筆者およびハルトマン教授を手伝ってグループに参加しているゲッティンゲン大学のクラウス・ヴィレー (Klaus Wille) 博士によって発見された。現時点で判明しているのは、わ

ずか七つの断簡にすぎないが、この数は今後増える可能性は大きい。七つの断簡のうち、ひとつの断簡 (我々の整理番号では MS 2381-10) は、ギルギット・バーミヤン第一型書体で書写された、『法華經』第三章に対應箇所を持つ樺皮写本の小さな断片にすぎないが、残りの六つは貝葉写本の断簡である。六つの断簡のうち、二断簡 (MS 2381-2, MS 2382-271) は『法華經』第三章に、残りの四断簡 (MS 2381-1a, -1b, -20, 82) は第二十二章に対應箇所を持つ。

これら六つの断簡は、いずれも五行という行数、そして内容と書体等から判断して同一写本に属することは間違いない。書体は、基本的にはギルギット・バーミヤン第一型書体ではあるが、ギルギット写本の『法華經』に用いられたものと完全な同一書体ではない。例えばギルギット写本の "s" は "s" 類似しているが、この断簡に現れる "s" は、インド型グプタ文字の形を保持しており、間違いない。恐らく時代的には、典型的なギルギット・バーミヤン第一型書体に先立つものであるう。完全に保存された貝葉が現時点では回収されて



スコイエン氏の山荘で調査中の筆者（1998年11月）

いないため、そのサイズは想像するしかないが、恐らく縦三センチないし三・五センチメートル、横四十センチメートルほどの横長の、さほど大きくないサイズの貝葉であつたと思われる。

筆者は他のメンバーの許可を得て、これらの断簡の複写の複写を『法華経』写本研究の世界的権威、徳島大学の戸田宏文教授にお渡ししたが、教授からの私信によると、そこには他のどの写本にも見られない独自の読みが含まれ、独立した系統の写本らしいとのことである。我々のグループ五人は、近い将来に、これらの『法華経』断簡が戸田教授の手で解読され、公表されることを願っている。ここで述べているように、現時点で発見されている『法華経』の断簡はギルギット・バーミヤン第一型書体のものに限られ、それより古い純粋なグプタ文字で写された写本は残念ながら未だ見出されていない。しかし断簡の数は膨大である。我々の役目は、戸田教授にお渡しできる断簡の数を一枚でも多くすることだと考えている。

さて完全な研究と出版は戸田教授に託すとして、こ

ではそのサンプルとして、六つの断簡の中から『法華経』第三章に対応する一葉（MS 2382-271）の表面のみのローマ字転写を示しておくので参考にして頂きたい。これは「ケルン・南条本」の七十六頁二行目から七十七頁二行目に相当する。なお両端が破損しているため頁数は不明である。

- 1 /// .kumārakāḥ sarve cintayitavyā na viśaman
aham api (ba)hukośakoṣṭhagāraḥ sarvasatvānām apy
aham imāny evapṛtūṇi [ma] ///
- 2 /// (hai)va tasya puruṣasya mṛśāvādadosaḥ syāt*
yena teṣāṃ dā(ṭra)kānāṃ pūrvam trīṇi yānāny
upadarśayitvā paścāt sarveṣāṃ eva mahāyā ///
- 3 /// di bhavet* yat tena puruṣeṇopāyakaśaḥ yena te
kumārakā tasmād ādipita gṛhā niṣkāṣitā
jivitenācchādita tat kasya hetoh [a] ///
- 4 /// na dādyāt tathāpi tāvad bhagavan sa puruṣo
na mṛśāvādi syāt* tat kasya hetoh tathā hi bhagava..
tena puruṣeṇa pūrvam evaitad aṇu] ///
- 5 /// [na mṛśāvāda] bhavati / kaḥ punar vādo 'nyena

puruṣeṇa prabhūtaṃ.. [kośakoṣṭhagāram astīti kṛtvā
putrapṛyatām eva manyamānenā] ///

六 種々の関連情報

次にこの機会を借りて、スコイエン・コレクションに関して、あるいはそれに関連するアフガニスタン・パキスタン出土写本について、この一年ばかりの間に筆者の許に届いた雑多な情報をアトランダムに記しておくことにしたい。

(1)スコイエン・コレクションに対する我々の研究は、ブロールヴィック教授の尽力で、オスロ大学とノルウェー学術会議からの予算も下りることとなり、ノルウェーでは正規の研究プロジェクトとなった。さらにメンバーの属する各研究機関の正規のプロジェクトとされるのが望まれるので、筆者も新年度より、勤務する大学研究所においてこれを研究課題として取り上げることにした。その際には、我々五人ではカヴァーしきれない写本について、我が国の研究者にも研究を分担していただく予定である。

(2) 我々のグループによる写本研究の成果は『スコイエ
ン・コレクションの仏教写本 (The Buddhist Manuscripts
in the Schøyen Collection)』と題して、その第一巻が一年
以内にオスロで出版される予定である。筆者はその中で
『勝鬘經』の断簡を担当する。なお、その先駆けとして
ハルトマン教授が『阿闍世王經』の断簡一葉をカンタベ
リー大学 (ニュージールランド) のポール・ハリソン (Paul
Harrison) 教授と共同で出版したばかりであるのでは非
参照していただきたい。⁽⁸⁾ なお本稿に先立って、筆者もス
コイエ・コレクションについての三つのレポートを公
表している。⁽⁹⁾

(3) 米国東洋学会の西部地区大会が昨年十月三十日か
ら三日間、シアトルのワシントン大学で開かれ、リチ
ヤード・サロモン教授らによるカロシユティ写本研
究のパネルが開かれた。筆者も聴講に行ったが、パネル
は "Buddhist Texts in Transit and Transition: Sans-
krit, Pali, Gandhari and Chinese" と題され、十名の研
究者が発表と討論を行った。サロモン教授自身は
"Newly Discovered Fragments of a Gandhari Version of

the Mahāparinirvāṇa-sūtra" と題して、上記スコイエ
ン・コレクションに見い出された『大般涅槃經』のカ
ロシユティ貝葉写本断簡についての研究発表を行っ
た。

(4) 一九九七年の秋にカロシユティ樺皮卷物が詰ま
った壺が再びロンドンのマーケットに現れた。巻物の量
は大英図書館のものより多かったらしい。しかもその壺
の銘文には年号が記されていたとのことである。これら
はイングランド西部に住む蒐集家によって購入され、大
英図書館に修復のため持ち込まれた。あまりにも巻物の
状況がひどく、また図書館の「東洋・インド省コレクシ
ョン部」が引越し作業で忙殺されていたため、壺と巻
物はいったん購入者に返された。その後どうなったかは
不明。

(5) 昨年十一月の二度目の調査の帰途ロンドンに立ち寄
り、スコイエ氏に写本を仲介したディーラーの一人サ
ム・フォッグを筆者は訪ねた。数日前に届いた写本があ
るといので見せてもらったが、縦十センチ、横六十セ
ンチメートルほどの大きな樺皮写本の束であった。癒着

した十数葉づつの三つの束に別れ、全部で五十葉ほどは
あったと思う。全部を剥がして保存修理するのが不可能
な状態ではなかった。書体はギルギット・バーミヤン第
二型。数枚の写真を撮った後、しばらく時間をかけて読
んでみると、その中に『典尊經 (Maṅgalaśāstra)』が
確認できた。帰国後、筆者の撮影した写真の中には、ゲ
ッティンゲンのヴィレー博士によって『幻網經
(Mañjuśāstra)』等も確認された。これは紛れもなく説
一切有部系梵文『長阿含』を記した樺皮写本の束であ
る。

(6) 上記のようにロンドンで『長阿含』写本の束を見て
帰国した一ヶ月後、『大法輪』誌の本年一月号に定方最
教授による新たな報告が掲載された。⁽¹⁰⁾ それは再び日仏交
易社の栗田功氏がパキスタンから入手した新たな写本の
束の最上面のみを写した一枚の写真を用いて、そこに写
っている写本を教授が独自に『典尊經』に同定し、ロー
マ字転写と和訳を示されたものであった。筆者はこれを
定方教授から直接いただいたが、それを見て驚いた。そ
れは筆者が一ヶ月前ロンドンのサム・フォッグで見た写

本そのものだったのである。栗田氏にも連絡を取って尋
ねてみたが、同氏はこれをパキスタンから入手してどこ
かに仲介されるつもりだったようである。しかし、写本
の現物は今はロンドンにある。果たしてこれがどこに落
ち着くのか現時点でははっきりしない。最近のスコイエ
ン氏からの手紙では、価格の点でお折り合いがつかな
いと言う。栗田氏の情報から判断して、この写本はアフ
ガニスタンではなく、パキスタンのギルギットあたりか
ら、土地の養蜂家によって発見されたもののようにあ
る。いずれにしても、早くどこかに落ち着いて欲しいも
のである。

(7) 『中外日報』紙の本年一月二十八日号に、栗田氏が
ドバイのディーラー宅で写した新たな壺の写真と、それ
に基づく定方教授の銘文の読みが紹介されている。この
壺にはカロシユティではなく、グプタ文字で銘文が
記されている。法蔵部の名が見えるが壺の中には何もな
し。こちらはすでにヨーロッパ方面に転売された模様。
これとは別に、スコイエ氏も新たな壺を一つ購入し
た。こちらにはカロシユティ文字で銘文がある。同

じく法蔵部の名が記されている。中には焼けこげてチヨコレート状になった写本が数点入っていた。

(8) 先月の初めに、またまた栗田功氏の写真を用いて定方晟教授が報告を出された。⁽¹⁾ 今度はギルギット・バーミヤン第一型書体で書写された『一万八千頌般若』の樺皮写本の束についてである。これはすでに現物が栗田氏によつて入手されたものである。この樺皮写本の束とは別に、本人に確認していないため、ここでは名前を出せないが、似た写本の束を購入した日本人もいると聞く。ある所で見たその一部写真によると、栗田氏の『一万八千頌般若』の泣き別れのように見えた。

以上のような世界の現状を何と形容したらよいであろうか。もしかして筆者が追跡しきれているのも、世界のマーケットに出回っている写本のほんの一部にすぎないのかもしれない。スコイエン氏の入手する写本は我々が責任を持つとして、今後続々と現れるかもしれないものはどうなるのか。それらが蒐集家の許に秘蔵されることなく、研究者に解放されることを願ってやまない。我々に現物は不要である。写真で十分である。現物は蒐集家自

身が密かに楽しんだらいいのだから。

註

- (1) ニコラス・シムズ・ウィリアムズ「古代アフガニスタンにおける新発見ーヒンドウークシユ北部出土のバクトリア語文書を中心にー」『ORIENTEー古代オリエント博物館情報誌』十六号(一九九七)三十一頁。
 (2) "British Library acquires oldest Buddhist manuscripts known", *The Japan Times*, June 28, 1996. 他に *National Geographic*, Vol. 191, No. 3 (March 1997) 四頁など。その後、大英図書館自身が発行するニューズレターの中でこれが詳しく紹介されている。
 "Buddhisms Unrolled?", *OIOC Newsletter*, British Library, No. 53/54 (1997) 一一五頁。
 (3) Richard Salomon, "A Preliminary Survey of Some Early Buddhist Manuscripts Recently Acquired by British Library", *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 117-2 (April/June 1997), pp. 353-358.
 (4) 定方晟「西北インドの法蔵部」『春秋』一九九六年一〇月号、二二―二三頁。その後、定方教授は同内容をフランス語による論文中に発表している。A. Sadakata, "Inscriptions Kharejiti provenant du marché aux Antiquité de Peshawar", *Journal Asiatique*, Tome 284 (1996 Numéro 2), pp. 301-324.

(5) この放映を元にした出版が『ブッタ大いなる旅路(1) 輪廻する大地・仏教誕生』NHK出版、一九九八年。五十六頁参照。同書には大阪大学の榎本文雄氏による解説が収められている。「最古の仏典一年代が特定できる現存最古の仏教写本」六三―六十八頁。NHK取材班のカメラが、アラビア文字のように向かって右から左に書かれているカローシユティー文字巻物を左から右に写し出していたのに笑った。

(6) Sam Fogg, *Catalogue 17 "Manuscripts from the Himalayas and the Indian Subcontinent"*, (London 1996), pp. 46-49, item No. 39, "Manuscript Remains of a Library probably from the Buddhist School of the Mahasangha-Lokottaravadin (108 leaves & fragments)".

(7) スコイエン氏は自身のコレクションを網羅するカタログを出版しているが(M. Schøyen, *The Schøyen Collection - Checklist of Manuscripts 1 - 2393*, Oslo 1997) 我々が一冊づつ同氏より頂戴したその一九九七年九月版のアフガニスタン写本の項では、サンプルのカラー写真とともに、その総数を四〇〇葉と三三三〇の断片と記している。写本の総数がその後も劇的に増えていったのである。なおこのカタログは数十部出版されたのみで、日本では入手不可能。

(8) Jens-Uwe Hartman and Paul Harrison, "A Sanskrit Fragment of the Ajātasatrukakṛtya-vinodanā-sūtra",

Suryacandraya...Essays in Honour of Akira Yuyama on the Occasion of His 65th Birthday... (India et Tibetica 35), Swistal-Odentorf, 1998, pp. 67-86.

(9) 「アフガニスタンからノルウェーへ」『佛教大学総合研究所報』十三号、一九九七年十二月、二十四―二十八頁。「ノルウェーに現れたアフガニスタン出土仏教写本ーマーティン・スコイエン氏のコレクションを訪ねてー」『月刊しにか』一九九八年七月号、八三―八十八頁。「シアトル、そして再びオスロとロンドンへ」『佛教大学総合研究所報』十五号、一九九八年十二月、十四―十六頁。

(10) 定方晟「ギルギット写本ー『典尊經』断片の解説」『大法論』一九九九年一月号、三〇―三五頁。写真は同誌の口絵に掲載されている(一八―一九頁)。
 (11) 定方晟「ギルギット写本・一万八千頌般若經」『春秋』一九九九年一・三月合併号、二二―二十四頁。

(一九九九年四月五日)

(まつだ かずのぶ/佛教大学教授)